

青山、志賀家墓所の空想と夢想 (三)

——『城の崎にて』と『佐々木の場合』—— (四)

町田 榮

要旨

本稿は、直接には、

青山、志賀家墓所の空想と夢想(三)——『城の崎にて』と『佐々木の場合』—— (一) 『跡見学園女子

大学紀要』第三十三号 (二〇〇〇年三月十五日発行)

青山、志賀家墓所の空想と夢想(三)——『城の崎にて』と『佐々木の場合』—— (二) 『跡見学園女子

大学国文学科報』第二十八号 (平成十二年三月十八日発行)

青山、志賀家墓所の空想と夢想(三)——『城の崎にて』と『佐々木の場合』—— (三) 『跡見学園女子

大学紀要』第三十四号 (二〇〇一年三月十五日発行) に掲載

に続く。なお、一連の志賀文学の論考に、

青山、志賀家墓所の空想と夢想(一)——墓参史の意味—— 『跡見学園女子大学紀要』第三十二号 (一九

九九年三月十五日発行)

青山、志賀家墓所の空想と夢想(二)——慧子の誕生、死、その埋葬—— 『跡見学園女子大学国文学科
報』第二十七号(平成十一年三月十八日発行)
青山、志賀家墓所の空想と夢想(四)——大正六年七月三十一日の墓参——(一) 『跡見学園女子大学国文学
科報』第三十号(平成十四年三月十八日発行)に掲載
がある。

周知の通り、志賀は執筆不能、発表作途絶について『和解』第九章に短く語る。活動再開五、六ヶ月後、初めて明かした、真新しい記述ではある。といって、全面的に信頼、依拠できるわけでもない。言挙げは慎まれるが、少し立ちどまって置きたい。

まず、「或る期間創作に筆をとる事はよさうと決心した事があつた」という。明確な一語一語は、それはそれに違いない。では、執筆停止の期限に見通しを持っていたのか。間近かな創作再開を前提とする「決心」、ではあるまい。不確かな、いずれ好転することもあれば、と可能性の薄い仮定を立ててみたに過ぎないだろう。自制でも、ましてや計画でもない。「其前後の自身の精神状態が余りに悪く、如何にも惨めな貧しい心」では、とうてい創作はかなわぬという。ことばを励まして律動を起こし、悲痛感を伝える。が、ここに具体性は皆無だ。みずから、作家の資格喪失を告白する。「精神状態」の改善に見込みはつくまい。努める方法がない。放任するより他になかろう。「創作の仕事を手を捨てる気はなかつた」にも、それを死守する概はない。安定して、平然たる口調だ。新進作家に訪れた危機の最中であつては、これはかぼそい最低線であつたらう。創作を捨てる、捨てないに追い詰められ、余地のない背水の境目に直面していたはずだ。不動の淡々たる回顧は、畢竟、再起、復調後に、しかも、その充実感に支えられた『和解』中のことばだからである。現況から遠く位置した窮状を要約してリアリティは乏しい。

——客観的な解きほぐしを要する期間である。

実情は、長く閉塞を余儀なくしたのだ。不可避の経路である。心身疲弊して、自滅していたのである。〈充電期〉、〈休止期〉などと呼ぶとき、実態を見失なう。

他方、ときあたかも、『白樺』の盟友たちの精力的な活動期間にあたる。とりわけ、志賀の大正五（一九一六）、は、もっとも深い昏冥に陥っている。底をついた年度といえよう。「大正五年三月十八日」の日付をそなえた手記（「手帳」）、志賀全集第八巻所収）に注目せざるをえないのだ。当時点の「自殺」に瀕した心情を記録しているからである。また、直接には同月号『新潮』誌上の『新進十家の芸術』という寄稿群に触発されたもの、と推測されるからである。

手記の前半部に、

自分は今危険の状態にゐる 自分は物の刺激を感じなくなつた気分が総てダルである、アニユーイを感じる、自分には何の大きな問題も大きい不安も大きい喜びも悲しみもなくなつた、自分は只呼吸してのみゐる一日が長すぎる、自分はこれから先に何が自分に起きるかといふ期待を持たなくなつた、自分は近頃讃められる、然し僅かに嬉しいやうな心持を感じずに過ぎない、自分の書いたものを見る、面白くないあとでイヤな気持が残る、自分は何をする気もない 自分は何が自分を満足さすかを知らない、自分は墮落しつゝある、と苦衷を吐く。ほかに「自分は今は先のやうな意味で死が恐ろしくなくなつた、生きてゐる甲斐ない気がして来た」もある。枯渇、荒廃、無

気力の感は強い。末尾が例の「自分は自殺しかねない」である。

すでに、積年の自殺願望の由来を、長女慧子きょうこの死によるその終息、消滅は考察した。以降、いわば、作家としての自殺状態が持ち越され、引き継がれて行く。時間的には、右の手記直後に里見『善心悪心』の出現、痛憤と義絶事件、慧子の誕生と急逝、その青山墓地埋葬の強行、改葬をめぐる父子暗闘などが惹起される。いずれも、何ら打開策のあるはずもない。

折りしも、文壇の焦点に立った白樺派が、盛んに論じられるときである。当五年度は赤木桁平の白樺作家論が耳目をそばだてた。手記中に、志賀は「自分は近頃讃められる」と記す。武者小路、里見、長与善郎、有島生馬などと並んで多く論評されている。数年前に『大津順吉』と作品集『留女』とを世に送って、緘黙久しいこの新進作家は忘れ去られてはいない。正反対の事態に遭遇したのだ。称讃、期待、激励のことばに包まれてしまう。むしろ、虚名にさらされたというべきか。当然ながら、静かな放置など患んではくれぬ。好意的な無関心など望むべくもない。高い評価に接して、「然し僅かに嬉しいやうな心持を感じるに過ぎない」。反応は鈍く、もの憂く、うつろだ。反発するところはないのか。無視する活力も残っていないようだ。創意を失なって、執筆を放棄した作家は苦笑よりも自嘲を、苦痛を浮かべていよう。自己嫌悪はぬぐいがたい。

以下に、管見に入った当期の志賀論を例示、抄出してみる。逼塞した現況に対して、いかに乖離しているかを見るためである。好意あふれる督励であろうと、督励のこもる限り志賀には重い負担になる。報いられ

まい。過大な評価、期待は衰弱しきって「自殺しかねない」作家には堪えられぬ。

大正五年一月『新潮』誌は、『大正五年文壇の予想』と題する、思想・創作・評論三界の「進展」をアンケートしている。うち、「明年来々の創作界に於て貴下の最も期待せらるゝ人々」の回答者の中に、大杉榮は次のような声援を送る。

従来僕が最も囑目してゐた作家は、荒畑寒村、志賀直哉、小川未明、武者小路実篤の五氏であつた。そして今後と雖も、矢張り此の五氏に期待を持たざるを得ない。且つ暫く作品としての姿を見せなかつた荒畑、志賀の二氏には、殊に捲土重來の拳を希はざるを得ない。なお、大杉自身「評論界」だけでなく、「創作界」にも自負するところがあつたらしい。

翌二月『文章世界』は、有名な赤木「新進作家論——『白樺』派の諸作家——」を掲載する。武者小路論に次いで、長文の志賀論を展開している。『網走まで』以来の短編を細かに評し、さまざまな特質を挙げて激励したのである。総括は、

——自己建設と自己築造とに向けられたる志賀君の一步一步には、必ずこの努力に伴随する一種の「戦ひ」があり、兼ねてこの「戦ひ」に打克つて行くに足る意力の勝利がある。／従つて志賀君はあらゆるものゝ前に眼を閉ぢることなく、すべてを容許することに於いてすべての「悪」なるものを否定し、人生の究極に残されたる肯定への階段を登り尽さうとする。現在の氏は明らかにその道途の半

ばにゐる。

後年、廣津和郎が『志賀直哉論』（大八・四『新潮』）で「正しからざるもの」の追及、それとの非妥協性を特質に示して論じた、その先蹤がここに在る。強い志賀、戦う志賀の論である。結語は、「惟ふに現在には武者小路君の時代であるかも知れない。併しその『後に来るもの』は当然志賀君の時代であらねばならない」という。いかにも、誰れ憚らない。

いよく、当三月『新潮』は『新進十家の芸術』の総題のもとに、一種の寄稿特集十五ページを組む。志賀も囑目したことであろう。その前書きに「最近一兩年の間に文壇の形勢が大分變つて来た。文壇は將に廻転期に立つて居るかの觀がある。其後継文壇の中心たる可き新進諸家中に於て、最も望みを囑せられつゝある左記十氏に対し、広く文壇諸家の感想を募つた。以て文壇の新機運に対する大勢を卜するに足らう」という。「新進十家」とは、武者小路を筆頭に豊島与志雄、吉田絃二郎、谷崎精二、藤森成吉、江馬修、長与、里見、素木しづ、掉尾に志賀を掲げる。編集企画の内情はわからない。当誌奥付に「編輯兼発行人 中根駒十郎」とある。寄稿二十六本中に、志賀の名を挙げて語つたものは十人である。

安倍能成「六家に対して」 志賀直哉氏の作品に久しく接しないのを遺憾に思ふ。

久米正雄「段違ひの作家」 先づ第一に、私は志賀直哉氏を「新進十家」などといふ名の下に、玉石同架する事を憤ります。吾々は常も長篇に於ける漱石先生と同位置を短篇に於ける氏に与へて居り

ます。否寧ろ、吾々に「近い」と云ふ意味で敬愛の度が深いかも知れません。少くとも氏の小説集『留女』は是迄日本で出した小説集の中で最高の地位を占めてゐる事だけは確信して居ります。中にも「正義派」一篇の如き、真面目に世界的の作品に数ふるを躊躇しません。徒らに日本の「大家」の列には、入れたくないが、爾余の某々と伍すべく余りに「段違ひ」な作家です。今は沈黙してゐるが、きつと其中に大作を吾々の前に提供して呉れるに違ひないと、一日も早く其日の来るのを待つて居ります。

柴田勝衛「十家に対する短評」 ◎志賀直哉氏。異常な心理の解剖には、特殊な敏感を持つた人である。而して氏は面白い材料が手に入らねば、無闇に書かぬ人であらう。併し書けば特異な物が出来るに違ひない。

久保田万太郎「東京者の悲哀」 東京に育つたもの、悲哀、東京に育つたもの鬱憂。——以前から私は志賀氏と里見氏を、私の先輩として尊敬いたし居るものに候。

加藤朝鳥「神経衰弱の描写」 志賀直哉氏の神経衰弱の描写は、到底他の企て及ばない處と思ひます。志賀氏の筆致は新進作家中最も余裕のある筆致と思ひます。此の人は既成の芸術に權威を認めながら、新しい境地を開拓して行く人でありませう。

近松秋江「立体的な書方ではなくては」 志賀直哉氏のを一二品、以前よく出来てゐると思つたことがありました。（略）一向その社中（注、『白樺』の）の方々の書かれる物には不案内ですが、何となく

志賀里見、両氏は不知の人ながら面白い人のやうに思はれます。

中村星湖「新生面を開く可き人々」 たゞ私は、現在沈黙を守つてをられる志賀直哉氏に最近の抱懐を披瀝して戴きたいと思ひます。

今の沈黙は深く養はんが為めの沈黙だらうと推察しますが、もし一身上の事情か何かで、心ならず逼息してをらるゝのなら、無理にもその事情を押退けて貰ひたいと思ひます。私は前から志賀氏といふ人が好きでした。

本間久雄「一寸した感想」 又、私は、志賀直哉氏は一種の天才的作家だと思つてゐます。

生方敏郎「志賀直哉氏の一作」 十氏の中で小生は四五年前に志賀直哉君のもので、小間使に関係したが親が不承知で何うやらしたといふ、今は筋も何も忘れてしまひましたが、其時分大に面白いと思ひつゝ、読んだものがあります。ずるぶん古い話です。

小山内薫「読んでる人」 志賀氏と里見氏とは古くからの友人故この両氏の作が自分には一番親しく感じられます。お二人とも天分に富んだ方で、将来の飛躍が思ひやられます。

ほかに、志賀を指名したのは谷崎潤一郎「多少読んで居る人」、赤木桁平「伸びる作家と伸びない作家」である。

右のように、十編を抄録してみた。それぞれ論旨、観点を異にする。各人各様の感想記である。が、沈黙を惜しみ、優しく、親しい心づかいをひとしく示している。筆者たちの寄せた高い関心、評価、期待に裏づけられているからであろう。そして、再起を切望する。

渦中の、満二年間緘黙する作家は自意識にとらわれ、かえって萎縮し

てしまふらしい。あの手記に、「自分の書いたものを見る」とある。年来、絶えてないことだろう。自作の掲載誌、作品集『留女』など遠ざけて、目もくれないでいたに違いない。「近頃讀められる」に促されて、久しぶりにそれらを手にとる。寄稿者たちの語り、評した自作を点検してみるのだ。『正義派』も、「異常な心理」を描いた作品も『留女』に収録されている。『大津順吉』、『范の犯罪』、『兒を盗む話』も再読してみたらう。しかし、検出したのは「面白くないあとでイヤな気持が残る」である。好意、期待さえ寄せつけぬ。反発ではない。衰弱した神経には堪えられなかつたのである。何の感興も湧かず、ましてや、往年、執筆時の「興奮を感じられない」(『和解』)。「自分は何をする気もない」が自己検証の結論であつた。志賀はよるべなく、途方に暮れてしまふ。

「異常な心理」、「神経衰弱の描写」を盛った作品への評価は、翌四月号『新潮』の「文壇時事」欄中、生田春月の精神『病理学の芸術』に踏襲される。志賀はとくに、これらを扱った自作を読んで、自己嫌悪を掻き立てられたであろう。後年、『創作余談』(昭三・七『改造』)で、『留女』収録作品でいえば、『祖母の為に』に「病的といふ事」の「飛躍」、「正気では現せない」表現を、『剃刀』は「強迫観念」を、『濁つた頭』では「夢からのヒントと神経衰弱の経験から作り上げた」といって、「かういふ病的な刺戟の強い」制作の充実感、成就感を回想している。現在、罹っている神経衰弱に積極性、生産性はない。彼我、対極に隔絶していよう。

閉塞の継続、もしくは更新、その理由に『新進十家の芸術』を契機とする自作検証を挙げてよいだろう。「大正五年三月十八日」付の手記を見る限りでは、緘黙はあらたまったのである。寄稿者たちの好意は逆効果であった。もとより、志賀内部の操作である。理性で統御されぬそれである。意志、意識のレベルではない。好意、親身や評価、期待、激励などに鼓舞されぬ。これらの決して届かぬところに入り込んでいるからであろう。志賀が死地から再生するのは、さらに一年後である。前述したように、招かれざる来客は多い。

同じく『和解』九章に創意回復、執筆再開について、こちらは詳述している。時期は大正六年二、三、四月である。ゆっくり時間をかけて、快癒して行く。

内外からともいえる両面の働きかけに応じて、志賀はよみがえる。初心者のようだ。友情が培った、『白樺』創刊前史を連想させる階段を踏んでいる。さすがに熱気はない。「回覧雑誌」を作り、『白樺』周辺誌のひとつともなるべき「同人雑誌」発行も目指したらしい。いずれも実体は不明である。すでに、文壇登場を果し、評価もえた新進作家の再出発とは思えない。最初からのスタートである。

立ち会って寄与したのは、やはり、親交篤い友人ふたりである。「M」すなわち武者小路であり、もうひとり「或る親しい友」とは園池そのいけ公致きんぢを指すらしい。というのは、いまだ、園池本人がそれとうち明けた証言を発見できないからである。傍証はある。間接的な状況証拠のもとでも、余人をもって代えられぬ。頭文字〈S〉も用いず、臆化し

て描かれるが、これは園池に対する配慮であろう。全二十二巻『志賀直哉全集』第二十二巻（平一三・三・二九刊 岩波書店）所収の監修阿川弘之氏の「年譜」によると、大正六年の項に「園池公致と二人だけの回覧雑誌を作る」とある。

ふたりが各方面で係った制作、発表作が『城の崎にて』（大六・五『白樺』）と『佐々木の場合』（大六・六『黒潮』）である。二短編の完稿をもって、志賀文学は起死回生する。二作品は大正二年来の各形成史を終える。

先き走るが、再生の触媒となった「M」、「或る親しい友」のふたりが、自身登場する『和解』を読んでいないはずがない。志賀の方こそ、他ならぬ誰れよりもふたりに披見を求めていよう。

実際、武者小路は最初の、しかも生原稿の読者である。「（大正六年九月十八日）⁽²⁾」のこと、『和解』脱稿の直後に「書き上げた時、武者に見せたら、讚めてくれた」ので、読み直しもせずに太陽通信社（『黒潮』発行所）に送稿したという。その日が原稿の締め切り日でもあった（『続創作余談』、昭一三・六『改造』）。

園池の方は、誌上で『和解』に接している。同年十月八日付志賀宛はがきに「黒潮を感激してよんだ」（宛書簡二八）と書いて送る。その前に九月二十日付の志賀宛はがき中に「黒潮は楽しみに待つ」（宛書簡二六）がある。この手紙は返信か、往信かが文面ではわかりにくい。が、『和解』完稿、武者小路披見、送稿の日付との連続でいえば、即日、志賀が園池に『和解』の『黒潮』誌発表を知らせたとするよりない。「黒潮は

楽しみに待つ」は返信として読めよう。積極的に猜せば、志賀は、作中に園池の登場を示唆したとも思われる。「楽しみに待つ」とは、いかにも含意豊かだ。いずれの書簡も、いま、保養転地先の鎌倉市大町二〇〇よりの発信である。

『和解』に描かれ、作品完成の直後にも篤い関連を持って、その証跡を残す人物は武者小路、園池以外にない。

広く一般に志賀の『黒潮』寄稿、『黒潮』に『和解』発表が周知のものとなるのは、大正六年九月二十六日付『時事新報』八面の「文芸消息」欄による。

▲志賀直哉氏 小説「和解」(一五〇枚)を脱稿「黒潮」十月号の為に寄せた

日付によって、九月二十日付園池の志賀宛書簡(二六)は、右の新聞記事に拠ったものではない。

なお、翌九月二十七日付『時事新報』八面の「文芸消息」欄に、「▲『新潮』十一月号 『人物の印象』には諸家の『志賀直哉氏の印象』を載せる筈」と予告が出る。機敏な『新潮』誌の編集企画である。印象記の執筆者の人選も依頼も済んでいる。ここでも、園池は少し関係する。

九月二十六日付志賀宛はがきに、「新潮社から君の印象を十一月に載せるから」と寄稿依頼があった旨をうち明ける。が、「あんまり創作もせずに雑誌的のものばかり他の雑誌へ出すのも又頼まれるのも面白くないので今度は断る事にした。悪しからず」(宛書簡二七)とことわりをいう。同誌七月号「里見弴氏の印象」に、園池は『伊吾』に対する思ひ

出」を書いているからである。

『新潮』の「人の印象」は大正六年二月に始まり、同九年十二月まで四十七作家を取りあげた全四十七回連載のシリーズである。「人の印象」(其十)志賀直哉氏の印象」(大六・一一『新潮』)は武者小路(大六・六)、里見(大六・七)、有島武郎(大六・九)に次ぐ登場で、有島生馬(大七・一)、長与善郎(大七・三)、千家元麿(大九・三)が続く。志賀の寄稿は誰れに対しても、まったくない。執筆依頼の有無についてもわからない。武者小路の隣村に建てた新邸入居は、前年末、大正五年十二月二十日⁽³⁾である。『和解』中に自身の回生を語った素朴、靈妙な一節は引用せざるをえない。武者小路受容による。抽象的、概念的、比喩的であろうと、それは可能な限り深奥と現実との通行を明かしているからである。「其前後の自身の精神状態が余りに悪く、如何にも惨めな貧しい心」の持ちは、癒されてそこを通り抜けるらしい。新生志賀である。

Mが暮れ近かくから隣村に住むやうになつてからは我孫子も賑やかになつた。五六年前から多く他の地方で住むでゐた自分は久し振りでMと繁々往来するやうになつた。而して日が過ぎ、月が過ぎるに従つて自分は自分の中にあつたMに対する古い愛が、又何か新しいものを付加しながら自覚めて行くのを感じた。此事は愉快だつた。而して自分の心に、影響を与へた。彼は実際相手の内にあるよきものを引き出す不思議な力を持つて居た。又彼は心と心の直接に触れ会ふ妙味をよく理解して居た。此事で彼に失望させられた事は一度もなかつた。自分には和らいだ、而して緩みのない気持の日が続

くやうになつた。

これは賛美であろう。称賛であろう。そうに相違ない。これほどに絶大な讃辞を捧げられた人物を他に知らない。救済者として、瀕死の志賀の前に立ち現われたのである。

あくまでも平明、簡素、しかも落ち着いた叙述である。全文に、われとわが心の動きをのぞき見て、愉悦の感に浸っている口吻が漏れる。おのずから和み、潤い、湧き出して「賑やかに」流れ始めた心中である。

記述に従えば、武者小路の隣村来住が発火点である。「繁々往来する」ことで、志賀の内奥に灯がともされる。これは消えない、中断期を挟んだ、「久し振り」の濃い交友再開である。回生したものは、二人だけの古い友情に納まらぬ。いったん死滅して、再生した関係だからである。普遍的な「愛」と呼んでいる。開放的でもあろう。武者小路への謝意がこもっている。

一節中に、「又何か新しいものを付加しながら眼覚めて行くのを感じた。此事は愉快だった」が要諦だ。成長性、柔軟性、進取性をそなえていよう。積年の滞り、しこっていたものが緩み、ほぐれ広がって晴れ晴れしい。——志賀が夢、無意識に重きを置く作家ゆえ、「眼覚めて行く」は看過できない。武者小路との交渉は表層より無意識に作用して、ここを活性化し、意識層に通行する。活気が各方面に向けて動き出す。「自分の心に、影響を与へた」は、蘇った無意識層から意識層への〈進行〉、その「愉快」な自得をいったものだろう。「自分には和らいだ、而して緩みのない気持の日が続くやうになつた」。現実化したのである。

「心と心の直接に触れ会ふ妙味」の精通者によって、志賀の「内にあるよきものを引き出し」される。その機微は「不思議な力」としかいえない。

このような武者小路受容、武者小路観は以降、一貫して揺るがない。いくつつか、例示してみる。すべて、右の引用部の自解ともなるう。

同様に「彼は彼に触れて来る人の持つ宝を引き出す不思議な力をもつて居る」（『自分は彼を信用して居る』、大七・七『新しき村』）がある。あの絶対的な「友としては武者小路実篤」の断言で知られる『内村鑑三先生の憶ひ出』（昭一六・三『婦人公論』）にも、「私にないものを（略）与へられたといふのではなく、あるものが共鳴によつて、はつきり自分のものになつた」という意味で、「影響」を受けた人という。「私は自分の過去で、心衰へ、生活に空虚を感じるやうな場合、よく武者小路の詩や感想を読んで、慰められ、勇気づけられた。勿論それは書かれた内容から来るが、何かそれ以上、武者にさういふ不思議な能力があつて、それから来るやうに感ぜられる事がよくあつた。それは武者の持つて生れた向日性といふやうなものが作用するのではないかと思つた事がある。（略）武者の一面である人心をインスパイヤする不思議な力」（『半世紀の交はり』、昭二五・三『武者小路實篤著作集』月報「調和」1）などといっている。

なるほど、武者小路と文学は、中間に隔壁なく、直心参入して精神を鼓舞激励するものであろう。それは受容者、感能者の無意識の深奥と交信するとき、もっとも実効を発揮するに違いない。志賀は、武者小路の

精髓を受けとめる。その人と「繁々往来する」、これだけで充分であった。およそ、武者小路は何ひとつ励ましも、慰めも、説得も、ましてや執筆の慫慂など、ことばにするまい。ふたりにとって不要である。

ついで、園池とは二人だけの「廻覧雑誌」を始める。ともども、執筆再開の方途を講じたのだ。共通項であろう。園池の側にも自身痛切な要請、事情を抱えていた。時めく武者小路との廻覧雑誌作成など想定できぬ。必要性がない。それは志賀にとって当然、武者小路との交渉に少し遅れて始まり、並行し、短期間で終る。一方が内的交流の極致をいったのに対して、こちらは実質的、行動的に踏み出す。

『白樺』創刊以来の交友であった。ここ数年、園池は志賀夫妻、武者小路夫妻（前妻房子を指す）と昵懇の間柄にある。若い独身の園池に結婚を勧めたり、相談に乗ったりしている。新婚の志賀夫妻が住む京都衣笠の邸（大四・一〜五在住）にも、神戸の療養所から幾度も訪ねて行く。文通にとどまらない。現在、我孫子近くに移転した武者小路と、志賀との交友は熟知しよう。園池は東京市麴町区平河町五―一五の邸から出向いて三者、厳密には五者交歓している。

二人だけの廻覧雑誌について、『和解』で次のようにいう。全文である。粗描したに違いない。簡潔、圧縮かというに違うようだ。園池省筆が著しい。

二月頃だった。自分は或る親しい友、（其友も健康の不調和から暫く創作に筆を絶つてゐた）と毎土曜二人だけで廻覧雑誌を作る事にした。半分笑談だった。然し其笑談から駒を出さうと云ふ気は二人

共にあった。自分はこりずに又長篇にかゝつた。三回程出した限、中止にして、今度は短篇を出した。其次も又短篇を出した。然しそんな事をしてゐる内に友は不慮な医者から健康に就いて不愉快な事を云はれた。自然廻覧雑誌も立消えになつた。然し随性で自分は又一つ短い物を書いた。それは誰にも見せなかつた。而して何れも土曜といふ期日の前に一ト晩か二ト晩でなぐり書きしたもので、自信もなし、発表する気もしてゐなかつた。

はるか後年になるが、園池の歿直後に、武者小路は追悼文をふたつ書いている。一本は『この道』（昭四九・二）巻頭に載せた『園池公致に死なれて』である。題名が哀切きわまりない。長い交友史を語っている。『心』（昭四九・三）も同人「園池公致追悼」のページに、武者小路『園池公致兄』と里見の『思ひ出づるままに』の二記を掲げる。里見文は口述筆記で、末尾に「談・聞」の付記がある。その武者小路は、

僕が我孫子にいた時、志賀直哉は園池と二人で気らくに同人雑誌のよきものをつくっていた。僕はその雑誌に出した作品の内から志賀に見せてもらった作品に感心して雑誌にのせる事にしたものもあつた。園池にも好意をもっていた。園池は気持のいゝ作品をかいた、僕達は友人としていつも好意を持っていた。身体は丈夫ではなかつたが皆に厚意をもたれ、よき人間として皆に厚意をもたれていた。

愛された作家である。『白樺』、『心』の同人は誰れも親愛感、同情心を寄せていたのだ。終生「よき人間」であり続け、「気持のいゝ作品」

を書いた点を評価する。至言、適評であろう。病弱、寡作の短編自伝作家は、ついに一冊の作品集も残さない。

前半部は、志賀と回覧雑誌を作った「或る親しい友」は園池を指すという、有力な証言である。「雑誌に出した作品の内から志賀に見せてもらった作品に感心して」雑誌発表を勧めたのは武者小路である。『和解』の記述に符号する。すでに、生井知子氏が『志賀直哉全集末収録資料及び関連資料紹介』（平九・一〇・三〇）『同志社女子大学 日本語日本文学』第九号）で紹介している。「同人雑誌のようなもの」とはわかりにくい。が、示唆的だ。文壇登場を果し、評価の高い新進作家に回覧雑誌作成はふさわしくない。再出発に際して、「其笑談から駒を出さうと云ふ気は二人共にあつた」というとき、いわゆる回覧雑誌とは異なる形態を企図していたかも知れない。例えば、二人だけの個人雑誌である。『白樺』を中心とする衛星誌、周辺誌が族生していた。結果的には、園池にとって定期的に執筆し、原稿を持ち寄り、評し合い、書き溜める互助、相互支持的な回覧雑誌にもならなかったらしい。

「或る親しい友」が語られるのは、引用部内の寸描である。回覧雑誌の終始とともに登、退場する。彼の寄稿はどうだったのか。ふたりの交渉も記されていない。志賀のひとり舞台、ひとり語りではある。だが、自作には謙辞というよりも、過剰な卑下をほどこす。配慮の跡がうかがわれよう。尋ねなければならぬ。

回覧雑誌は五回位作られたようだ。志賀の寄稿回数である。「毎土曜」にちなんでいえば、当年の土曜日は二月三、十、十七、二十四日、

三月三、十、十七、二十四、三十一日、四月七、十四、二十一、二十八日である。定期的な「毎土曜」ではなかった。「立消え」になったのは、園池の健康上の支障による。急な悪化でもないらしい。「友は無遠慮な医者から健康に就いて不愉快な事を云はれた」と。語気、語調は荒く、誹謗の念をこめる。鎌倉への転地静養によって推すと、主治医から容赦なく読書、執筆を禁じられ、生活一新の転地を厳命されたようだ。園池は思いがけぬ事態に直面する。健康回復を信じて疑わず、「医者」も許可して、回覧雑誌に臨んだのであろう。ならば、医者は前言をひるがえしたのだ。

志賀は、悲嘆にくれる同行者を目のあたりにしている。再起に失敗して、脱落して行く。志賀は臙化して、「健康の不調和」に語りどめたらしい。

虚弱な体質、困難な病症とは園池文学の特性である。およそ、作品中に頭痛、胃痛、下痢、疲労、神経衰弱など体調不良が訴えられていないものはない。学習院の初等科、中等科在学のところはスポーツ好きで、健啖家であったという。成人後は、いわゆる不定愁訴に悩まされ、多くの医師の診療を受け、神戸の「衛生院」に入ったり、転地、温泉治療に努めたりしている。確たる病名はわからない。亡くなったのは八十七歳、昭和四十九（一九七四）年一月三日である。同一月四日付夕刊『毎日新聞』・『日本経済新聞』各七面、同五日付『朝日新聞』十五面の訃報には「脳いっ血のため」、「脳卒中のため」死去とある。

執筆活動は、つねに阻まれていた。『白樺』以来、寡作ながらコンス

タントに創作を発表している。しかし、大正四年九月五日付『大阪朝日新聞』の「(日曜)附録」第二面の全面に掲載された、短編『結婚期』をもってブランクに入る。志賀と試みた回覧雑誌は潰れる。復活するのは前記、人物記『伊吾』に対する思ひ出(大六・七『新潮』)を別して、大正八年四月『白樺』第十周年記念号に発表した『一人角力』である。千家元麿、犬養健のほか全同人が寄稿した大冊である。

自伝『一人角力』は代表作のひとつであろう。廣津和郎が「園池氏の一人角力」(大八・六『新潮』)のち『作者の感想』大九・三・二〇刊 聚英閣に収録時に「園池公致氏の『一人角力』と改題)、『鎌倉より』(大九・三『文章世界』)で行きとどいた理解と論評とを加える。讃辞を捧げて、優しい。園池作品のなせる業だ。いかな強面の評家も薫染されよう。

この短編小説が、三年半余の沈黙を破った復活作である。注目すべき点がある。叙述内容が、大正四年春から同六年一月までに限られていることである。発表時現在に及んでいない。ブランクの前半期を語る。ということとは、前掲『和解』の「二月頃だった」に始まる、あの断章に接しているのだ。しかも、作品内容の首尾をそれぞれ志賀、康子夫人との交渉で画していることである。『一人角力』は、もしかすると、右の引用部に宛てて書いたもの、執筆動機とするかも知れない。志賀文がいつさ省筆した、園池側の事情をみずから詳述したと読める。回覧雑誌にいたるブランクの理由なり、経緯なりを明かしたのであろう。執筆再開の意図は挫折し、沈黙はさらに二年ほど続く。もとより、志賀に意趣、角逐などつゆ含むものではない。園池自身、志賀の我孫子に転居を考えて

いたらしいからである。柳宗悦は「(略)又園池か山脇(注、信徳)が我孫子に住む事になりそうだ。丁度いゝ家を見つけたのです、めてゐる。(略)」(大七・三『白樺』の「編輯室にて」という。

会ったこともない、縁談相手の女性に対して、ひとり相撲の思い入れを尽した誠実な物語である。滑稽でも、自嘲でも、独善、献身でもない。リアリティは豊かだ。作者の人柄がにじむ。謙虚な、柔軟な自恃を保ち、品位は損なわれぬ。

発端部は、武者小路の戯曲『二つの心』(大元・一一『白樺』)の新富座上場を観劇する場面である。大正四年十一月二十九日から十五日間、新派合同で『瀧の白糸』五幕、『二つの心』一幕、大切喜劇『玉手箱』五場が上演されている。主人公は武者小路夫妻、房子夫人の妹たちと一緒に観劇する。栈敷で見合い写真を手渡され、盛装したA子に心がとまる。実はその春、京都の衣笠園に志賀を訪問した折りに、康子夫人から「S子さんの友達だと云ふ人の事」を勧められた、同じ女性だったからである。健康に自信のない自分は、結婚の意志はないと断って置いた。今夜、F子に強引に勧められてみると、結婚するのなら「是れが最後の機会」とも思う。体調の回復を第一に考えざるをえない。辞退はするが、健康に自信が持てるようになり、それまでA子が独身であったら結婚しよう、ひそかに決意する。

翌五年は、「結婚と云ふ目標に専心」努力して過ごす。医療相談に行き、診療、通院し、塩原温泉に入湯して春夏を送る。読書も、執筆もなげうったのである。なるほど、結婚は『結婚期』にある公卿華族、子爵

家の嗣子にとって当面する大問題であった。祖父公静は明治十七年に子爵を授かり、右近衛権少将、奈良県知事、侍従を歴任して致仕し、父実康は襲爵して掌典、のちに掌典次長、宮中顧問官、母春香は伯爵正親町家の出身、という家である。『白樺』同人の正親町公和、実慶とは従兄弟の關係にある。家内では、代って弟公功の家督が話題にあがるようになる。幸いに、ようやく年末には「自分の健康のよくなつた」実感が持てる。

年が替つて正月早々自分はその頃Iと云ふ田舎に居るS君やM君を尋ねた。その日は愉快だつた。Iの景色はどんより曇つた日も又よかつた。静かな、流れのない沼を板をそいだような舟が静に棹差して行つた。それを見墮ろすならかな丘の上で自分はF子さんやS子さんやそう云ふ若い人達に混つて賑かに立つて居た。

主人公が志賀と二人だけになって、告げられたのは「A子が北国の或る大きな本山の坊さんの処へ嫁に行く事になつた」である。二年來、真劍なひとり相撲の純情にともした恋心は消えてしまう。が、相変らず、A子が自分を待っているように思われてならない。——園池の結婚は大正七年十二月、武者小路房子の妹、竹尾茂子とである。

園池に残つたのは創作であろう。健康を利用して、執筆再開に轉換するほかない。回覧雑誌は伏兵に遭う。健康回復は陥穽だつた。粗暴にも、「友は不慮な医者から健康に就いて不愉快な事を云はれた」。矛先は医者に向けてはしよう。罵倒する。が、一面では厚顔、無責任な医者に絶大な信頼を置いて、安々と騙された「或る親しい友」への舌打ちも聞

こえてくるようだ。好人物で、はがゆい。この破廉恥な医者を、『一角力』に登場する十人の医師中に求めることができる。「しと云ふ医学士の友達」がそれであろう。脈はとらず、「自分の肉体上の顧問となり自分の事を始終心配して呉」れて、塩原温泉にも同行している。結局、「自分の健康の良くなつたのを感じた」も独り合点だつた。致命的な打撃である。園池に活路はない。

志賀は恋も、結婚も、健康も、執筆も水泡に帰した園池の目撃者である。誰れにもまして、至近距離から絶望にひしがれた後ろ姿を明確に見ている。そして、ひとり復活して行く。回覧雑誌を廃止し、園池の去つた後、「惰性で自分は又一つ短かい物を書いた。それは誰にも見せなかつた」という。余勢に違いない。むしろ、この制作に志賀が客観性を与えていないことに注意されよう。園池の死を体して再生した証である。付言すれば、もと子爵、正四位園池公致（明一九・四・二九〇昭四九・一・三 1886-1974 享年八十七歳）は東京都谷中霊園、乙種三号十五側の園池家墓所に葬られている。菩提寺は天台宗、護国山護法院天王寺（日蓮宗、長耀院感応寺と称して開山）である。寺域の大半を共同墓地とした谷中霊園は、いまも寺院墓地のおもかげを残して、青山霊園とは景觀を著しく異にする。

回生をいうならば、死を前提としなければなるまい。なるほど、武者小路は死をたずさえて志賀の前に現われる。我孫子入居の目的は右肺上部結核と診断された、その転地療養にあつた。幼少年期に父実世（明二〇・一〇・二七、享年三十七歳）、姉伊嘉子（明三二・一一・二二、享年二十

一歳)を結核で失なっている。近親に天逝者はあまりに多い。八人兄弟のなかで健在するのは兄公共きんぐもと武者小路とである。姪芳子の死(明四一・九・七、生後七ヶ月)を『芳子』(明四四・一一『白樺』)に、嫂万子の死(大三・七・七、享年三十一歳)を『死』(大三・八・一二、二五『東京朝日新聞』六面)に、伊嘉子の死も『姉』(大五・五『白樺』)に書いている。

『新らしき家』(大五・一〇『新潮』)は大正五年八月十二日の肺結核診断と同十五日の再診による誤診判明とを中心に、その前後を物語っている。ふたつの日付の間、十三日から二泊三日で武者小路夫妻は我孫子の志賀を訪問する。結核発病と転住療養とが話し合われたのだ。もともと、我孫子行は長女慧子を失くした(大五・七・三二、生後五十五日)、志賀夫妻を慰めるためであった。先きだって、同八月十一日付はがきで「十三四日にゆきたい」(書簡二七三、『武者小路実篤全集』第十八巻所収)旨を知らせてある。調べてみれば、志賀は慧子の死に重ねて、武者小路の死を全身に浴びている。十五日に志賀と帰京して、別の医師の診察を受け、異常のないことが判明する。その夕方、志賀から電話があったので朗報を伝える。我孫子志賀家に電話はない。翌八月十六日付志賀宛はがきに「いつも君の処へゆくと気がいい、今度は病人のつもりで行ったからなほ君達の厚意を感じた、しかし今の処はなんでもないらしい。よく見てもらったが病気がらしい処はないさうだ。あんなにもんでもらったら半分以上(注、右肩の痛み)なほった(略)」(宛書簡七八)という。

転居、新邸建築の計画は進められて行く。九月九日に着工し、十二月七日を入居とする予定も立つ。実際には遅れて、前述した通り歳末、十

二月二十日の転入となる。夏目漱石の死(大五・二二・九)に遭い、葬儀(同二二・二二、青山斎場)にも参列したからである。

このような死から生への、向日的な通行者の来村が「我孫子も賑やか」にする。受容者の心中も同様である。創意が目覚め、執筆は遅滞なく運ぶ。

執筆順調を支えたものが、もうひとつある。第二短編集の『新進作家叢書4大津順吉』(大六・六・七刊 新潮社)出版である。みずから、刊行が創作意欲の「刺戟」になりそうだという。なぜなのか。『和解』に明かされる挿話は興味深い。新潮社が叢書編入の出版を要請し、志賀が受諾するには前提があった。いわば、同叢書『4大津順吉』刊行縁起である。なぜならば、この作品集はいったん消滅して復活刊行したものだからである。武者小路が大きくかわる。

丁度其頃或る本屋から叢書の一つとして自分の前に書いたものを出したいと云つて来た。最初本屋はMの物を頼みに行つて、其時Mに自分のも出したいと話した。Mは多分承知しまいと答へて、其儘自分にも話さなかつたが、Mの細君が一寸それを云ひ出した時に、自分を出して貰つてもいいと思つた。自分は其出版が自分に新しい創作をさす何かの刺戟になりさうな気がしたからである。自分には何か書けさうな気もしてゐた。

あの「新進作家叢書」は長期にわたり、全四十五巻(大六・五・一〇、一四・九・一〇刊)を出版して行く。今、その緒に就いたばかりである。最初の刊行予告は大正六年五月一日付発行『新潮』、同『早稲田文学』

一三八号発表のものであろうか。前者によると、「新興文壇の全面容を看よ／新進作家叢書」とうたって、第一編『新らしき家』武者小路、第二編『恐ろしき結婚』里見を大書し、〈統刊目次〉に『生あらば』豊島、『大津順吉』志賀、以下六作品集の刊行を列記している。菊半裁判、アンカット、瀟洒、軽便なシリーズの特徴は「新興文壇」の動向を同時進行的に、随時に盛って刊行するところにある。最もホットなアンソロジーである。志賀も〈新進作家〉とするには少しためられよう。いささか臺が立っている。しかも久しく発表作はなく、旧作を叢書に編入するためには出版時が急がれる。

新潮社は「最初」、武者小路のもとを訪ねる。前記、『新進十家の芸術』の筆頭に掲げた、有力な作家である。他誌上でも広く盛名を馳せている。まず、『新潮』発表の新作を標題に採った同叢書『1新らしき家』（大六・五・一〇刊）出版の許諾を手に入れる。第一編、第一回配本である。ついでに、親交厚いという志賀の意向を間接的に打診してみる。一向に沈黙を破らぬ作家だからである。もしかすると、秘かに仲介を求めていたかも知れない。まだ、志賀に『新潮』誌掲載の作品はない。初めて寄稿するのは『好人物の夫婦』（大六・八『新潮』）である。武者小路の回答はにべもなかった。出版を「多分承知しまい」と否定的に述べる。観測というよりも、ほとんど志賀の意を代弁した口調だ。叙述の運びを見れば、新潮社が直接に要請しても、確実に志賀の固辞に会う、そのように読める。だから、武者小路は「其儘自分にも話さなかつた」。潜航して消息を絶つ。実質的には下相談にもならず、沙汰済みである。以上

は、園池と回覧雑誌を始める直前のことごとであるう。

後日、それは「何か書けさうな気もしてゐた」に留意すると、途絶えがちでも回覧雑誌の出ている「丁度其頃」である。「二月頃」か。叢書志賀集が武者小路夫妻の来宅した折り、話題に混じってふと出現する。妊娠中の康子も同席していよう。「Mの細君が一寸それを云ひ出した」という。発言者はとかく創る人、結びつける人の武者小路房子である。志賀夫婦も結んでいる。機縁、機微を感じたに違いない。この「時」のうち明け話で、初めて志賀は潜在し、消滅した作品集を知る。歓談裡によみがえつたのだ。もとより武者小路に対して恨み、怒りもない。関知しないところから飛来したものに心惹かれ、それをかなえてやろうとする。改めて、出版応諾が新潮社に伝えられ、正式な要請を受ける。「前に書いたもの」だけをまとめた『4大津順吉』は急遽、早期刊行をみる。万事は円滑、順調に運ぶ。が、最新作『城の崎にて』も、『佐々木の場合』も収めていない。二制作に着手する前だからである。いまだ、新作収載など思いもよらぬ。

武者小路のとった一存の措置を付度し、憶測をめぐらす必要はない。ただ志賀の実情を告げ、計らったまでである。意図、作為の入る余地はない。

「Mは多分承知しまいと答へて、其儘自分にも話さなかつた」と、「自分は出して貰つてもいゝと思つた」との呼応に死と再生のモチーフ、その顕現を見るのだ。双方の間に、「Mの細君が一寸それを云ひ出した」が置かれているとき、彼我、一直線に並んで浮上して来たのを見る

のだ。時空の異なるふたつの場面を通行して、志賀集は死生する。いったん死滅したものが訪れて再生を促す。それを実現してやる。経路は反転ではない。だから、出版の決意は創意に波及し、増幅して行く。右の一文は、如上の読み取りのほかは受け入れざるまい。この短編集の献辞「亡き母上に捧ぐ」は、志賀文学再生の内奥を明かす。母追慕の念におさまらぬ。

思えば、志賀はさまざまな死の形象に遭遇する。その前にさらされている。避けられなかった。生のそれよりも、死に親昵してしまつたらしい。嘯目したものが、死の情動を貯蔵する者による選択だつたからである。蜂、鼠、いもりはひとしなみに死を免れない。線路内の鳩を危惧するのは、自己投影だからである。ようやく、「自殺はしないぞ」と鈍い反応をもらす。自身の裡にかかえこんだ死、直ちに自殺にとどいてしまったが、の反射を浴びた生き物たちである。その都度、死は少しく放出して和み、辛うじてその遂行を回避する。鳩目撃の後、不健全な「自殺しかねない」が常態になる。私見によると、大正二年八月十七日のあの夢見が誘導した成り行きだ。現況を招く。当初こそ異常な精神の昂揚を發揮するが、短期で終息をみる。激しく燃え尽きた。次いで、夢が本来そなえていた死への志向が表面化して作用しつづける。境界はその年の秋。城崎滞在中にきたした明暗、高低、干満の逆転である。沈降は直進して、尾道の鳩で「自殺」という底についてしまう。

前述したが、里見『善心悪心』(大五・七『中央公論』)が最後部三章に電車禍遭難を詳述して発表される。志賀は読まずにいられない。それは

旧稿「いのち」の該当部など足もとにも及ばない。当事者と目撃者との差異である。今、両者を兼ねる。新たな遭遇に堪え切れぬ。三年前のそれが眼前に、精妙に繰り広げられたからである。多分に誇張され、文藻を凝らされた凄惨な光景が、結果的には志賀に向けて死を突き付けてしまう。「鞠のやうに五六八間さきへケシ飛んで行」って、「切腹した人のやうにうっぷして」いる自身を見るのだ。出血に動転した介助者の杞憂「死ぬかも知れない」、「助からない」は自身の如実な危惧に変わる。里見は志賀の内奥に容量を超えて、圧力の高い死の情動を強引に注入してしまつたのである。

直後に、かけがえのない長女慧子の急逝に遭う。あの徹宵看護は親心の発露ではある。が、それは一面、かねて死の情動に固定された志賀を自証する行為だ。不可抗力のなせるわざだ。死を多量に蓄積して来た者の痛切で、大規模な死の凝視をきたす。真実の死に直接触れて、虚妄の「自殺」は払拭されたに違いない。しかし深奥では、死は位相を更新したようだ。ますます内攻し、強度を加え、重く定着してしまつらしい。その発散、消費は容易ではない。至難事となろう。死は牢固として抜きがたく、不動のものとなる。従って、翌年の回覧雑誌も、執筆再開も、『新進作家叢書4大津順吉』刊行の経緯も、いずれも時間を要し、独力ではならぬ。康子の妊娠、武者小路と房子、園池、新潮社に支えられ、協力をえてかなえられる。

なお、内なる死は固着して離れるまい。自力をもつて回生しない限り志賀は死中に在る。

われわれは『文章世界』、『新潮』誌上の評価、期待、激励が実効しなかったことを知っている。志賀は鼓舞されない。拒んで自己嫌悪に陥る。閉塞の実情に精到していないからだ。そこに盛ったことは筆者たちの真意にはかならない。しかし、生を振りかざした評語であった。好意をこめた論評に、死を内蔵しないのは当然だ。

ならば、志賀復活の扉は閉じられたままなのか。不可能事か。いや、活路はひとつあろう。死に徹するより他にあるまい。かつてない強烈無比な内なる死の形象、わが子の死にもまさるそれに邂逅すること、これである。わが身の死体と化した形象、その夢見である。いうまでもなく、『城の崎にて』中に極め付きの、死の形象化が描かれている。

一つ間違えば今頃は青山の土の下に仰向けになつて寝てゐる所だつたなど思ふ。青い冷めたい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷も其儘で。祖父や母の屍骸がわきにある。それももうお互に何の交渉もなく、——こんな事が想ひ浮ぶ。

想像、思考内容とするには余りに生々しく、精密である。実際に青山、志賀家墓所内に立って、その泉下に結ばれた映像であろう。夢見の事実談と信じて疑えぬ。墓参史に照らして、故祖父直道の月命日、十三日と推定されるひとり墓参時の遭遇である。その年月は、『城の崎にて』を執筆した「大正六年四月」⁽⁵⁾としなければならない。当日、志賀は故慧子墓所詣でも兼ねて祖父、故生母銀を墓参したのだ。次回の墓参は『和解』冒頭に語る七月三十一日、「墓参りの為め我孫子から久し振りで上京した」である。

屍骸は一体ではなかった。志賀自身のそのみならず、祖父、生母の三体が仰臥している。おびただしい死の情動がストレートに形象化されたのだ。何んと、大量な死の放出であろう。逆にいえば、何んと大量のそれが滞留していたことか。年来、蓄積したものが堰を切って一挙に流出する。さながら奔流というに足りよう。死の情動は蕩尽されてしまうだろう。

しかも、志賀個人の屍骸には「顔の傷」が刻まれていた。四年前、山の手線電車接触による怪我は、大正二年八月十七、八日付日記、草稿「いのち」に記録がある。頭部裂傷と背中の打撲傷とである。奇跡的に軽傷ですむ。この意味では、「顔の傷」は事実と反する。しかし、志賀は誤記としない。『城の崎にて』の作品集収載に際して本文細部の改訂をほどこすが、この部分は手をつけず現行にいたる。絶対であった。やはり青山墓所の祖父、生母の墓前で見た夢そのままに記述したに違いないのだ。頭部裂傷から「顔の傷」への転化は、夢見のひずみであろう。それが夢であることを保証する。夢は現実をなぞるとは限らない。「顔の傷」を明らかに重んじて凝視している。

「青い冷めたい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷も其儘で」という。死の決定的な証印が押しあつた。それは死体を毀損するものではない。屍骸の死顔のうえに、ゆるがぬその極印をいただく。次元の高い、深い死である。ただ単に、われとわが遺体を夢見たわけではない。ありえぬ傷痕が現出しているのだ。おそらく、稀有な夢の訪れに恵まれたのだろう。志賀は完全無欠な、完成された自己死の対面者となる。跪拝こそし

ていないが、宗教的ともいえる崇高感、恵福感にうたれているらしい。聖なるの冠詞をつけて、「顔の傷」を受けとめるだろう。生きながらに、おのが死の自得を安んじて持つことができる。一種の理想的な臨死体験であろうか。死の情動など残滓もとどめるまい。

墓参史上、画期的な墓参となった。大正六年四月十三日と私推する青山ひとり詣だが、長く拘禁して来た死の情動から解放し、志賀を救出する。そこにあれば、〈父の子〉たる事実すら湮滅し、「祖父の子」として再生可能の夢殿であるからだ。死と再生の原理が支配する墓地であるゆえだ。閉塞期は終り、自己再建に向って針路をとる。

『城の崎にて』の完稿、形成史そのものが、作家自身の死から再生への過程を体現し、みずから証明していよう。この日の夢見が草稿「いち」の〈下〉の城崎部、その他の宿案をよみがえらせ、構想を『城の崎にて』たらしめる。青山、志賀家墓所で授った、それは夢想と呼べよう、を〈城〉の〈崎・先〉なる奥つ城に位置づける。そこへにて〈働く死と再生のモチーフを太い直線に載せて語る。単純明快だ。武者小路が「し、つかり書いてあると思ふ」(『和解』九)と作品を評し、雑誌に発表を勧めた理由である。すなわち蜂、鼠で死の相を、桑の葉の顫動でいのちの注入を、いもりで再生後の生を託して描く。これらが〈城の崎〉へにて、無意識層の営みで統一しているのは言をまたない。

(未完)

注

- (1) 志賀の最初の作品集『留女』(大正一・一・一刊 洛陽堂)の収録作品は、順序に「祖母の為に・鳥尾の病氣・剃刀・彼と六つ上の女・老人・襖・母の死と新しい母・クローディアスの日記・正義派・濁つた頭」。巻頭に「最初の著書を祖母上に捧ぐ」と献辞。
- (2) 大正六年十月一日発行『黒潮』第貳巻第十号に発表した『和解』末尾の付記「(大正六年九月十八日)」による。なお、作品集『夜の光』(大正七・一・一六刊 新潮社)に初収録のとき以降は削除。
- (3) 大正六・一『白樺』の「編輯室にて」に、「武者小路が二十日に我孫子へ引越した。郵便は我孫子局管内根戸とすれば届くさうだ」と小泉鉄が記している。
- (4) 大正三・八・二『東京朝日新聞』六面の「新小説予告」に『嫂の死』／武者小路實篤／右明日より掲載」とある。
- (5) 『城の崎にて』の初収録作品集『夜の光』の記載による。